

「話題提供」

藤掛洋子

Yoko Fujikake

「ネーリスト」

田中伸治

Shoji Tanaka

松本由香

Yuka Matsumoto

三浦倫平

Ryusei Miura

「司会進行」

石川正弘

Masahiro Ishikawa

Plenary

Session

2. 第1部 Plenary Session 開催記録

複眼的思考から読み解く
パラグアイのスラム
～コミュニティ・国家・南米大陸～

第5回

都市科学

シンポジウム

都市を
複眼的に
思考する

この項目では、ZoomおよびYouTubeにて配信した第1部の書き起こしを掲載しています。

2.1 趣旨説明

石川 こんにちは、都市科学部の石川です。本日の進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。本日、私どもは会場にありますが、現在コロナ第6波という状況ですので、皆様にはオンラインで参加いただいております。こちらの会場でも適宜マスクをつけて進行させていただきます。

はじめにシンポジウムの開催趣旨を説明させていただきます。今年の都市科学シンポジウムは第5回目となります。今回のテーマは「都市を複眼的に思考する」です。現代は、世界の人口の半分以上が都市部に住んでいます。最近の都市に関する研究ではプラネタリー・アーバニゼーション、直訳すると「惑星の都市化」という新しいキーワードも誕生しています。現代は、まさに、都市が地球上で急激に拡大する時代です。そして、都市・社会・環境がグローバル・ローカルに複雑に絡み合いながら大きく変革する時代です。気候変動によって人類社会への脅威が危惧されている時代でもあり、また、経済活動のグローバル化によってグローバルサウスにおける労働力と自然環境の搾取が急拡大する時代です。都市が抱える様々な問題やリスクは、多面的です。文系・理系の枠を超えて、いろいろな視点から問題やリスクを捉える必要があります。まさに、「都市を複眼的に思考する」こと、それが求められています。Z世代と言われる現在の若者が複眼的な思考を身に着けて「新しい捉え方」「新しい枠組み」、文理融合・分野融合によるイノベーションを近い将来に生み出してくれることを期待して今回のシンポジウムを企画しました。

それでは本日の進行について簡単に説明します。まず、第一部では「複眼的思考から読み解くパラグアイのスラム～コミュニティ・国家・南米大陸～」と題しまして、都市科学部・学部長の藤掛洋子先生にお話をいただきます。パネリストとして建築学科の松本由香先生、都市基盤学

科の田中伸治先生、都市社会共生学科の三浦倫平先生にご参加いただきます。進行役の私・石川も、環境リスク共生学科の教員として議論に参加させていただきます。専門分野の異なる、学科を超えた教員でのパネルディスカッションを行いながら、都市を複眼的に思考するということを行ってみます。パネルディスカッションに続いて、皆様からの質問コメントなどに回答したいと思います。今回のシンポジウムでは、聴衆の皆さんとの一体感をつくりたい、インタラクティブなシンポジウムを目指して、Slidoを用いて質問コメントを受け付けております。

今回のシンポジウムは都市科学部の授業〈都市科学C〉の一部として実施します。〈都市科学A・B・C〉を受講した最終段階として、〈都市科学C〉を履修している学生の皆さん、そして、事前登録を行っていただいた皆さんもぜひSlidoを用いて質問コメントの共有を行ってみてください。

第一部の終盤には都市科学部ロゴ表彰が行われ、3名の方が表彰されます。休憩をはさみまして第二部のNetworking Sessionが始まります。ビデオ・チャット・ツールSpatial Chatを用いてバーチャル・スペースにおいて開催します。この第二部は、学生を中心としたもので、都市科学部での学び・社会とのかかわりかたについて議論するとともに、都市科学ってなんだ、都市科学をビジュアライズすること、そして都市科学部の学生たちがこれまで蓄積してきた知識、実践を通して社会に貢献する知識をビジュアライズすることを目的としております。その後バーチャル・スペース上で懇親会を約1時間開催しますので、懇親会もぜひご参加ください。

2.2 学長挨拶

石川 それでは、ただいまより、第5回都市科学シンポジウムを開催します。開会の挨拶として、本学学長であります、梅原出先生にお言葉をいただきたいと思います。梅原先生、よろしく願いいたします。

梅原 皆さんこんにちは、学長の梅原でございます。一言をご挨拶したいと思います。

皆さんよくご存知の通りだと思うんですが、本学には5学部ありまして、大学院が6大学院ございます。学部はですね、教育学部、経済学部、経営学部、理工学部、そして都市科学部ということになります。本学の特徴的な学部としては、なんとといっても都市科学部であろうというふうに私は思っています。国立大学で「都市科学部」というような名前の学部は、なかなかないですね。もう完成年度をむかえて、つまり4年以上たつて、ますますですね、この都市科学部が充実してくるんだろうなというふうに思っています。

「都市」の名前がついているというのは、非常に重要ですね。本学は横浜・神奈川に唯一本部を置く国立大学なわけです。横浜がバックグラウンドにあるということになりますよね。神奈川の他に県西のほうへ行けば、過疎に悩むような、そういう地域もあります。日本の縮図のようなのが、神奈川であろうと思います。ここに都市科学部の知が、どうコミットしていくのかというのは、今後私としてすごく期待しているところです。

例えば、本学は昨年の10月に、台風科学技術研究センターというセンターを作りました。例えば、台風と都市を言うと、防災とか、減災とか、こういうことが考えられますね。防災減災、例えば横串をさして、都市科学部を見せていくというのも一つありなんじゃないかなと思っています。こんな視点で都市科学部をさらに発展させていくということ、私自身がですね、先頭立って頑張っていこうかなと思っていますので、ぜひ皆さんも、防災とか減災なんていう視点で都市を考えていくというのは、一つ重要なことだと思います。

あるいは、11月にお茶の水女子大学と連携協定ですね、包括連携協定を結びました。12月には千葉大学です。千葉大学と包括連携協定を結びました。これとっても意味があるんですね。千葉があつて、東京があつて、それから横浜があつて、まさに環東京湾でアライアンスを結んだということです。地域というと、いま申し上げたような横浜と神奈川というのがありますが、横浜国立大学の強みは首都圏にあることだと僕は

思っています。首都圏、これまあ首都圏、いいんですけど、環東京湾という、こういうひとつのスキームで都市を考えていくというようなこと、これも本学ならではの取り組みになるのかなと思っています。

今言ったように、台風科学技術研究センターであるとか、環東京湾の取り組みであるとか、大学のこういう取り組みですね、都市科学部はコミット、どんどんしていける、そういう学部だなと思っています。ぜひ皆さんも、こういう大学の営みっていうんですかね、これにしっかりと、学生の諸君もコミットしていただきたいなと思います。

今日、長丁場になるようですが、私非常に楽しみにしています。

特に、文理融合とか、知の統合とかいうことで、世界水準の研究大学を目指す、これ私のビジョンなので、今日は複眼的にということ、複眼的っていうのはたぶん知の統合と相通ずるところがあると思うんですね。

なので、今日は本当に楽しみにしています。皆さんも最後まで楽しんでください。

今日は頑張っていきましょう。

2.3 第1部：話題提供およびパネルディスカッション

石川 それでは、都市科学部・学部長の藤掛洋子先生に「複眼的思考から読み解くパラグアイのスラム～コミュニティ・国家・南米大陸～」と題しまして、話題提供をいただきます。

藤掛先生は世界各地を俯瞰することに長けている先生です。グローバル・ローカルの視点から、本学講義の〈都市科学A〉を担当されています。都市科学部の1年生というのは、SDGsの意識が非常に高いこともありまして、今回、開発人類学者であり、ジェンダーと開発がご専門の藤掛先生にグローバル・ローカルの視点で見ているリスク概念とパラグアイのスラムについて紹介していただきます。

藤掛 皆様こんにちは。

梅原学長よりご挨拶をいただきました。学長ありがとうございました。今日は、長い1日ではありますが、楽しい一日でもあります。私たちのシンポジウムも楽しんでいただきたいですし、第2部の企画も都市科学をビジュアライズするというので、楽しんでいただきたいと思います。そして、石川先生、素晴らしいオープニングのご挨拶、そしてこの度は司会を担ってくださいまして、ありがとうございます。

先ほどもご紹介いただきましたとおり、私は〈都市科学A〉の第3回目の授業として6月25日に南米の都市とパラグアイのスラムについてお話をさせていただきました。本日司会をされている石川先生が私の授業を視聴され、リスクというテーマは文理融合でいろいろな議論ができるのではないかとということで盛り上がりました。そこで、〈都市科学A・B・C〉の取りまとめの責任者をされている三浦倫平先生(Aを担当)、田中伸治先生(Bを担当)、松本由香先生(Cを担当)、そして全体のコーディネーターとして石川先生とこの企画を準備してきました。

「複眼的思考から読み解く
パラグアイのスラム
～コミュニティ・国家・南米大陸～」

開催日：2022年2月19日(土)
横浜国立大学都市科学シンポジウム(オンライン) 13:00~14:30
横浜国立大学都市科学部

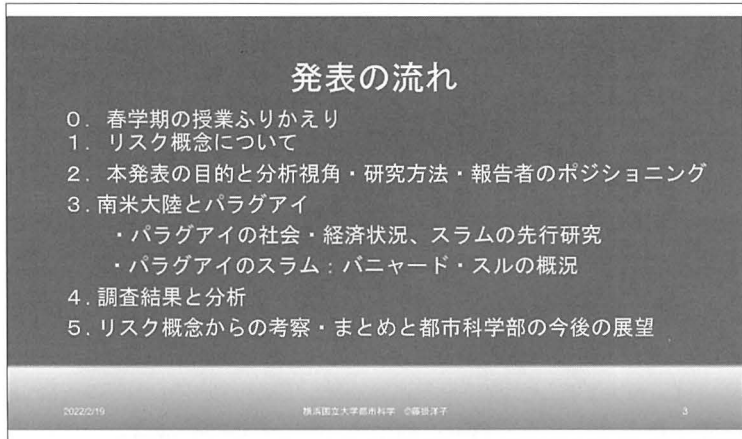
話題提供：藤掛洋子(都市科学部長・都市社会共生学科教授)
司会進行・パネリスト：石川正弘(環境リスク共生学科教授)
パネリスト：田中伸治(都市基盤学科教授)、松本由香(建築学科教授)、三浦倫平(都市社会共生学科准教授)

2022/2/19 横浜国立大学都市科学 ©藤掛洋子

画像：発表スライド2

「複眼的思考から読み解くパラグアイのスラム～コミュニティ・国家・南

米大陸」。大きなテーマですね。南米大陸全体まで今日の話提供でたどり着けるかわかりませんが、リスク概念に加え、パラグアイのスラムの話をしていきたいと思います。



画像：発表スライド3

今日の発表の流れです。まず、春学期の授業の振り返りをいたします。その後、リスク概念、都市科学部でよく用いているこの概念について、おさらいをいたします。この後、本発表の目的と分析視角、研究方法、私のポジショニングについてお話をいたします。次に、南米大陸とパラグアイの経済状況や、「パニャード・スル」といわれるスラムの状況について概観したあと、事例紹介と、スラムで生きる人々の日常実践について紹介していきます。最後は、リスク概念からの考察と、まとめ、都市科学部の今後の展望についてお話をいたします。また、内容については私、そしてパネリストの先生方と議論していきたいと思います。

--

藤掛洋子 (2021)「パラグアイのスラム『パニャード・スル』におけるリスクとジェンダー— COVID-19禍におけるカテウラ地域住民の日常実践にかかる一考察—」、国際ジェンダー学

会編『国際ジェンダー学会誌』、Vol.19:9-31。をもとに加筆して原稿を作成しております。

石川 ここで本日のパネリストの先生方を紹介させていただきます。どうぞお越してください。それでは、一言お願いいたします。

松本 建築学科の松本です。専門は建築構造学、特に耐震性や防災を専門にしております。どうぞよろしく願いいたします。

田中 都市基盤学科の田中と申します。専門は交通工学という分野ですけれども、今日は他の学科の先生、それから参加している学生のみなさん、第二部での学生のみなさんの発表を楽しみにしています。どうぞよろしく願いいたします。

三浦 都市社会共生学科の三浦です。都市社会学や地域社会学を専門にしております。今日はどうぞよろしく願いいたします。

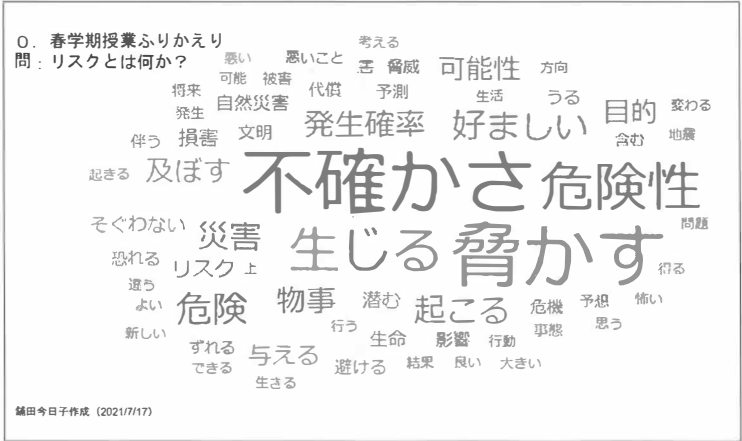
石川 パネリストの先生方、本日はよろしく願いいたします。藤掛先生、それではこれから「複眼的思考から読み解くパラグアイのスラム～コミュニティ・国家・南米大陸～」と題しまして、話題提供をお願いいたします。よろしく願いいたします。

藤掛 パネリストの先生方には適宜コメントを頂けたらうれしいなと思っております。先生方どうぞよろしく願いいたします。

O. 春学期授業ふりかえり 6月25日の授業で1年生の意見をまとめたもの	
リスク	リスク共生
1 危険性	危険性を減らす「共存」
2 生活にひそむ危険	リスクを理解して共存する
3 予測可能な危険	上記を事前に関くことができる社会
4 災害とか大難がどうにも出来ないもの	災害とか人間の方ではどうにも出来ないものに対応して生活していく
5 予想違った大影響が発生する可能性であります	ハザード以外の要素を人為的にコントロールし、リスクをまげようとするものではありません。先兆は社会の肌感の察知とおっしゃいましたが、自分はリスク共生の態度の一端として捉えました。「リスクがあることを前提に物事を進める態度である」と捉えました。それと、社会の肌感の察知だけでなく、社会の法律などに「想定される慣用方法と違う方法を改善できる。余白を設けることで、リスクと共生することもできるのではないか」と思いました。
6 物事は自分の予測以外の方向に進む展開	リストをりするのではなく、リスクの一部を取り入れて、一部を削減し、一部を回避すること
データ取りまとめ作業： 顔田今日子担当	

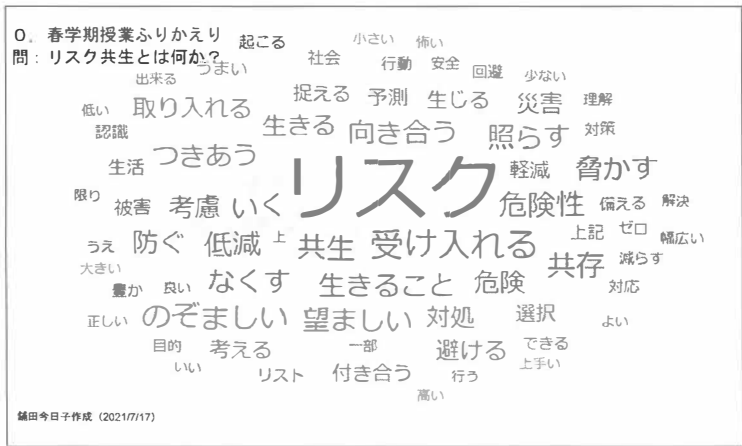
画像：発表スライド4

さきほどお話ししましたとおり、授業の中でですね、すでに6月25日の授業「リスク共生とは何か」、「リスクとは何か」というテーマで学生の皆さんにディスカッションしていただきました。そのディスカッションの中で、学生の皆様が書いてくださったものをまとめたものがこちらになります。これはごく一部なんですけれども、リスクは危険性、リスク共生はリスクを理解して共存するなど、興味深い回答をいただきました。そこで得られたデータを大学院生にも手伝ってもらいテキストマイニングで分析しました。テキストマイニングとは、文字を対象にしたデータマイニングのことです。今回みなさまに書いていただいた文章をマイニングした結果、リスクに対しては、「不確かさ」、「危険性」、「災害」、「書かす」などの単語が多くでてきました。



画像：発表スライド5

次に、「リスク共生」とは何か？ という問いに対しては、「リスク」、「受け入れる」、「向き合う」、「つきあう」、「生きること」などの単語がみなさまの認識の中にあることがわかりました。



画像：発表スライド6

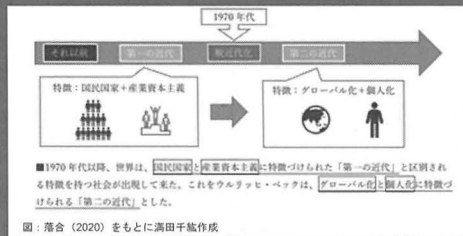
みなさまは授業のことを覚えておられるでしょうか。一言で「リスク」や「リスク共生」といってもそれぞれが色々な思いでこれらの用語を用いているということがわかりました。実は、研究者の間や異なる研究分野でも、リスク概念は統一されていない部分があります。これから社会科学の中で用いられているリスク概念についてお話をしていきます。

イギリスの社会学者であるアンソニー・ギデンズ (Anthony Giddens) は『暴走する世界：グローバリゼーションは何をどう変えるのか』という書籍の中で以下のように言っています。「ヨーロッパ以外の伝統文化のなかに、リスクという概念はみあたらない。リスクという考え方が人知にはじめて備わったのは、16世紀ないし17世紀以降のことであり、“risk”という用語は、『海図なき航海』について語るときに用いられ、これはスペイン語あるいはポルトガル語が英語になったものではないか」と言っています。ギデンズは、環境問題をリスクと関連づけることによって、環境問題への私たちの理解を深めることができ、そして、いくつかのわからないことを解き明かしてくれるのではないか、ということも言っております。

今日使用されるようになったリスクという用語は、1980年代に社会科学の分野に台頭してきました。ウルリッヒ・ベック (Ulrich Beck) は、近現代における科学技術の発達と工業化・産業化の進展は、人々を物質的に豊かにする一方、新たな危険の登場を招いたといいます。それはしばしば対処が極めて難しいものであり、ベックは、近代化が作り出した自然破壊や人間破壊などに対して「リスク社会」という概念を用い、警鐘を鳴らしてきました。また、社会科学におけるリスク概念の幅は広く、ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann) は risk と danger を峻別して考える必要があると指摘はしていますが、実際に英語で書かれた論文には、risk、hazard、danger といった用語が、ほとんど同じ意味で用いられていると指摘されています。

このように見てくると、学生の皆さまが考えていた多様な「リスク」や「リスク共生」にかかる認識と、学術界で言われていることには、「多様である」という点に共通項があるように思えます。

1. リスクの個人化（ベック1998）とジェンダー



2022/19

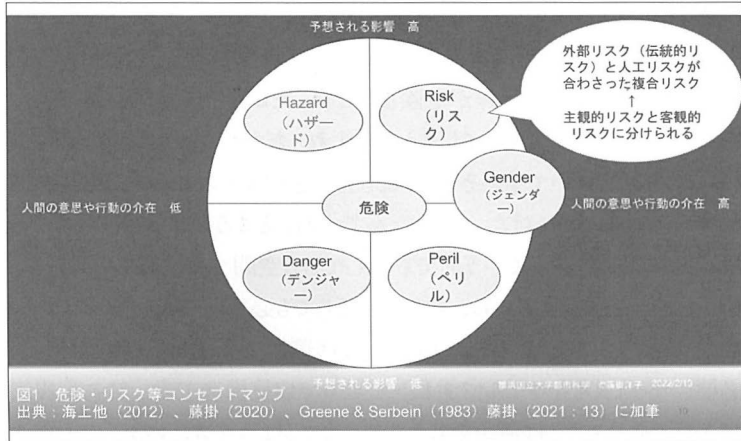
横浜国立大学都市科学 藤田洋子

9

画像：発表スライド9

次にリスクとジェンダーについて説明します。ベックは、リスクの個人化ということを目指しました。実はこの個人化とジェンダー課題には密接不可分の関係があります。リスクの個人化は、1970年代以降に見られた様々な中間集団の解体によって、個人による自己選択の余地が拡大するとともに、ライフコースが脱標準化し、失業や離婚などの人生上のリスクを個人が処理するという社会から生まれました。外の世界で男性、夫が働き収入を得る、そのパートナーである妻は家庭にあって家事と育児に専念するという社会から、経済発展を遂げた社会に移行し、福祉制度が充実した結果、個人が単独で制度に向き合う～非常によい機会ではありますが～同時に、リスクは直接個人が担うものになっていったというわけです。これを、ベックは「第二の近代」と名付けました。この第二の近代というのは、先進国で言われるわけですが、これから事例として扱う、パラグアイのような新興国、あるいは格差の大きな国では、「第一の近代」と「第二の近代」が、混在しているのではないかと考えております。パラグアイは、社会保障制度が脆弱なことから、農村部やスラムでは、母や娘が家族やコミュニティメンバーの福祉を担う責任を負っています。社会福祉制度が充実していないスラム～今日スラムを取り上げ

ますけれども～そこでは、人々は、リスクはどのように捉え、対処しているのか、春学期の授業の延長線上で、考えていきたいと思います。



画像：発表スライド10

これまでの議論を参考に、危険・リスクコンセプトマップを海上(2012)を参考に私がまとめてみました。これは〈都市科学A〉の授業でも紹介したものを少し発展させたものです。今回のリスク概念のレビューを通して、リスクの捉え方が多様であること、そしてリスクには、外部リスク、伝統的リスクと人工リスクが加わった複合的リスクがあること、そして、リスクには主観的リスクと客観的リスクに分けられることがみえてきました。また、Greene & Serbein(1983)は、リスクをわけること、その分け方は、主観、客観、そしてそれらを分けていくことで、リスクがきちんと分析できるのではないかと指摘しております。このように、私のいる分野と、都市科学部の先生方の分野では、おそらくリスクの捉え方が違うように思います。石川先生、ぜひ、パネリストの方に、聞いていただけないでしょうか。

石川 それでは、藤掛先生がパラグアイの事例に入る前に、先生方から、ここまでの話でコメントをいただきたいと思います。いかがでしょうか。

松本先生、お願いします。

松本 建築構造の立場から、いきなり爆弾発言してしまいますけれども、地震が怖いなら建物なんて作らないほうがいいんですよ。極端なことを言ってしまうえば。そもそも屋根とか床とか、質量のあるものを自分の頭上に固定していること自体が危険なことで、だからその建物が崩れると、中にいる人間がつぶされてしまうんですね。だから、極端な話、私怖いからテントでもいいです、そういう生き方を選択するのであれば、ある意味で地震なんて怖くはない現象なんですよ。ところが、暑さ、寒さに苦しむこともなく防犯っていう面でも安心できる空間で生活したいと、そういう生き方を選択するから、建物がどうしても必要になる。テントでいいです、という生き方はしたくない、そういう選択をするから、地震対策が必要になってくるものなんですよ。ですので建築構造工学、特に耐震工学の面からリスクとは何かを考えると、我々がどう生きたいか、どんな生活を営みたいか、その選択がもたらす課題という捉え方をしています。

石川 松本先生、ありがとうございます。この図(スライド10)を見て、非常に興味深いなと思ったので、私からもコメントさせていただきます。リスク対応という概念で考える場合には、縦軸はこの図と同じように損害の大小(予想される影響の大小)ですが、横軸は頻度の大小というものになります。しかし、この社会学者のマップは、横軸が人間の意思が入ったものが入っていないものになっており、「人間の意思」で区分しているというのが、興味深いなと思いました。たとえば、私に関わる地震ですとか、超巨大地震で大きな被害が起こるようなもの場合には、予想される影響が、これは大ですよ。巨大地震っていうのは、津波の被害とか、東日本大震災のようなものは、すごくハザードが大きいですけど、リスク要因である地震には人間の介入がないです。この分類区分上だと、どこに入ってしまうのかなど悩んでしまいます。この区分だと、人間が介入したものはうまく区分できています。逆に人間が関与していないケースも考える必要があるのですが、都市科学Bで習っていると思いますけど、リスク対応の

概念を組み合わせて、さらなる三次元的なリスク概念というものをつくっていけたら、おもしろいかなと思っています。

藤掛 ぜひ、つくりましょう！確かに、石川先生がおっしゃるように、リスク、この図でいうところの赤い部分が人間の生活様式の変化によって、おそらく右側に延びてきているわけですよ。ですので、都市科学部で考えなければいけないのは、資本主義社会の中で営んでいる人間の営みをこの図のように4象限に分けても、実際にはこの線を超えて、もう少し広がっていく、そして3Dになっていくということです。これはぜひこのシンポジウムの成果として導き出したいですね。今後ぜひ考えていきたいコメントだと思います。ありがとうございました。

三浦 今の石川先生と藤掛先生の話に関連するのかなと思うのは、社会学だと、ハザードが社会的な諸要因で大きくなったり小さくなったりするという脆弱性(ヴァルネラビリティ)の議論がされています。おっしゃるとおり、図でいうところのハザードの部分が横に伸びてきているのかなと思います。その点とも関連するのですが、先ほど石川先生が開会式の話でプラネタリー・アーバニゼーションの話がされていたと思います。これは簡単に言ってしまうと、どんどん地球自体が都市化していくという話で、人が住んでいない非都市的などころも都市と密接に関連して、相互に影響を与えているという議論です。人新世の議論とも関連していると思うんですけど、人類が地球環境に与える影響は人知を超えた形で広がっている。なので、図のリスクの横軸の部分は今後再検討する必要ももしかしたら出てくるのかなと思います。感染症とかも、温暖化が進むことって、蚊が増えて、人に感染が移っていく、また永久凍土にあった有害物質が空中に放出されるみたいな話もある。そういった形で、どんどん人間がリスクをすべて制御できるという考え自体が問われている。そういう意味でも、リスクというものを改めて文理融合的な視点で見ていく必要があるのかなと思います。

石川 学長挨拶のなかで、台風というキーワードが出ていました。本来、台風という自然現象はですね、地震のように地球の自然が勝手に起こす現象です。しかし、台風は地震と違って、気候変動、地球温暖化みたいに人為的な影響が関わってくるものです。自然現象プラス人間の影響で、規模が大きくなるとか、発生回数が増えるとか、そういうことも懸念されるので、人為的影響という概念を台風のような自然現象にとりいれていけば、この横軸(人間の意思)が逆に重要であると気づきました。

田中 私も都市基盤の分野でリスクをどう捉えているかということで説明させていただきます。都市基盤で扱われるリスクっていうのは、やっぱり自然災害、地震ですとか、津波、台風、洪水などあるわけですけども、一般的には、それらは、ハザードとして扱います。そういった自然現象はハザードで、それに対して、それが人間に与える影響についてリスクと捉えています。ですので、極端な話を言えば、人が住んでいないところで、どれだけ巨大な地震が起きても、それはリスクとしてはゼロ。そうではなくて、やはり、人間が住んでいるところで、どのくらいの災害が起きるか、で、それに対してどのような高さの堤防をつくるのか、頑丈な構造物をつくるのか、そういったことで、リスクをできるだけ少なくすることを考えているのが、都市基盤での分野の話で、やはりそこには人間が必ず介在しているかなと思います。そういった考え方も、今回のようなテーマについて、どうあるべきかということが議論できるとよいかと思います。

藤掛 先生方コメントありがとうございました。学長も頷いて聞いて下さって、ありがとうございました。本当に文理融合で考えていくと、いろいろなものが見えてくると思っています。

それではこれから、パラグアイのスラムの事例を取り上げていきます。スラムの住民は「リスク」をどのように捉えているのかについて考えていきます。私は専門が開発人類学になります。質的調査を行なっている人間です。論理実証主義的なアプローチではなく、解釈主義的なアプローチ

をとっております。つまり、参与観察やインタビューを通して人々の語りを聞きとり、文脈知、実践知、そして地域にあるローカルナレッジに近づこうとする、そういう調査手法をとっております。調査データは2011年より実施しているスラムにおける参与観察と、実際に私自身がプロジェクトを行っておりますので、アクション・リサーチという形で、そこで得られたデータをもとにお話をしていきます。

それでは、いよいよ南米大陸の話に入ってきます。経済成長を遂げるパラグアイは人口704万、日本の千葉県よりも少し人口規模の大きな国であり、面積は日本の1.1倍になります。宗主国スペインから、1811年に独立しました。35年間続いた独裁政権ののち、1992年に民主化に移行しました。民族は、白人と先住民の混血が人口の95%、先住民が2%、欧州系が2%。日系人も7000人住んでおられます。公用語は、スペイン語と先住民の言語グアラニー語になります。所得格差を表すジニ係数は0から1で表されるわけですが、パラグアイの場合には0.46、それから、2020年時点では0.44ということで、格差が非常に大きな国であることがわかります。

2020年のパラグアイ国立統計局が刊行した報告書によると、190万人のパラグアイの方々が貧困に暮らし、COVID-19により貧困率が上昇、そして、ジェンダーベースドバイオレンス(GBV)も増加しているといわれています。これは、UNWomenが、COVID-19がシャドウパンデミックだということを示し、世界的にGBVが増加したことについても警鐘を鳴らしています。パラグアイもその国の一つになっております。

また、少し文脈はずれますけれども、パラグアイは水の国と言われています。ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、およびウルグアイの下にはグアラニー帯水層があります。世界三大瀑布イグアスの滝がブラジルとパラグアイの国境にあり、パラグアイには世界最大の発電量を誇るイタイプダムがあります。

今日は、時間の関係で触れませんが、一昔前は石油戦争と言われていたものが今は水戦争の時代と言われています。また機会があったらお話ししたいと思います。

パラグアイの社会・経済的状况をご紹介していきます。パラグアイの社会はジェンダー平等政策の進展によりその格差はみえにくいものとなっているものの、ラテン・アメリカに特徴的なマチスモ、男性優位思想が、スラムや農村部に残っています。criadazgoという習慣もまだ残っています。この慣習は、恵まれない家庭の子どもを引き取り、家庭で働かせることを意味しております。パラグアイを含む、多くのラテンアメリカ諸国に存在しています。criadazgoで育てられる子どもたちは給与や教育を十分に受けることができず、長時間労働を強いられ、しばしば、性的・身体的虐待を受ける例も報告されています。多くは家事労働を担っています。

そのような状況にある農村やスラム、特にパラグアイのスラムに関する先行研究は、医学的な研究は蓄積されつつありますが、社会科学的な観点から調査された研究はまだ十分ではありません。

貧困層の方々が住まれているバニヤード・スルについてお話します。バニヤード (Bañado) というのは、スペイン語で湿地帯、スル (Sur) は南という意味です。パラグアイのスラムは、このバニヤード地域に多く点在しています。首都アスンシオン南西9kmから10kmほどに位置しております。アスンシオン市の人口が、2021年度で52万人です。スラムで暮らす方々は、おおよそ10%～25%程度、5万～13万人といわれています。なお、居住登録がないことから正確な数は不明であります。アスンシオン市役所は、1996年に公式見解を出し、パラグアイ川の川岸であるフランハ・コスタネラ・デ・アスンシオン (franja costera de Asunción) をプエルト・ボタニコ・デ・バニヤード・ノルテ (Puerto Botánico del Bañado Norte:- Franja Costera norte) からランバレの丘 (Cerro Lambaré del Bañado Sur :Franja Costera Sur) までの約16Km、面積は1,640ヘクタールであるとし、この河岸整備や観光開発を進めています。その中の一部は貧困層の方々が住んでいる地域になりますので、住民と行政の間でのせめぎあいが起きています。このことは後でまたお話をいたします。

こちらが事例として取り上げるバニヤード・スルの写真です。住民の方々は、湿地帯を不法占拠し、居住しています。住居の裏や周りの湿地帯にプラスチックゴミを敷き詰め、自ら埋め立て作業を行い、土地を拡

大していきます。土地ができると手押し車などを置いて次々と「自分の土地」を拡大していくわけです。可岸で暮らしているので、雨季に浸水することが過去にもありましたが、近年、その浸水の頻度は増加しています。2015年12月には150cmほどで、多くの学校が沈みました。その後も、2018年、2020年、2021年と浸水し、住民は退去を余儀なくされています。

バニヤード・スル地区は、パラグアイでは通称カテウラといわれています。本日の発表で、私はスラムといたり、カテウラといたりしますが、これも、これはバニヤード・スル地区のことを指しています。1950年代にこの地域に人々が初めて住み始めました。初めて住んだ人がカテウラさんという人だったという説と、ラグーナ・カテウラ (Laguna Cateura) という沼地がありまして、その名称から取ったという2つの説があります。

パラグアイの都市の成長は3つのステージに分けられています。第一期は、農業の拡大と世界最大の発電量を誇る、さきほど申しましたイタイプダムの建設による景気拡大期、第二期は、成長の鈍化、金融危機による経済停滞、第三期は、マクロ経済の安定期です。

1950年から60年代より今日まで、人々が不法占拠し、スラムとして成長していった地域になります。1984年にはパラグアイ厚生省国家衛生環境サービス局がゴミ処理場を探す必要ができました。人々が毎日多くのゴミを出すはその処理場がないということで、1984年にカテウラ地域が選定され、大きなゴミ処理場が設置されることになりました。

これ以降より現在まで、1500トンのゴミがカテウラ地区に運び込まれるようになりました。貧困層の住民の方々はウエストピッカー、すなわちゴミ拾いをして生業として生きています。スペイン語ではガンチェロ／ラ (Ganchero/a) といいます。ウエストピッカーの歴史がこの時始まったと言えるでしょう。

これまで現地に入りインタビューしてきましたので、バニヤード・スルの状況についてさらにご紹介いたします。

パラグアイの川の増水により、住居から追われる住民がいたり、治安が悪く殺人が起きたり、窃盗なども起きています。そしてスラム出身とい

うことで、都市で働くことができないといった問題、スラム出身であるというだけで差別を受ける方々もいるわけですね。そのために、良い仕事をするのができない、結果、ウエストピッカー、すなわちゴミ拾いとして生きていくという負のサイクルの中で暮らしている方が多いです。それから、GBVもたくさんあります。女性に対する暴力、レイプ、望まない妊娠、COVID-19以降の家庭内暴力の増加などです。あとは、子どもたちが親から暴力を受け、そのトラウマに苦しんでいる事例などもたくさん見られます。パラグアイ特有のシングルマザーの問題もあります。、河岸は、国境があるようでないような状況ですので、隣国から不法侵入で人が入り、ドラッグの売買が行われたり、若者が巻き込まれドラッグ中毒になってしまっている事例も報告されています。実際に私自身もスラムで調査をしている中でそのような若者にあつたことがあります。

あとは、ジェンダー問題として、女性の賃金が相対的に低いのですが、ごみ収集でも女性の賃金が低いことが明らかになっています。

パラグアイ川の増水により住居を追われたカテウラ地域の住民は、丘の上にある広場や、政府指定の場所であるバリオ・オブレロ (Barrio Obrero) 地区に避難します。水が引くまではずっと留まり続けます。長いときには半年ほど避難生活をすることもあります。

この、バリオ・オブレロ地区という政府により指定された場所には、板などが支給され、避難してきたスラムの住民は自分たちで組み立てを行います。そして、仮住まいを作るわけなんですけど、近年、洪水による浸水被害が毎年頻繁に起きていることから、仮住まいは「○○さんの家」ということで、個人所有の物件になっているようなものも調査時には見受けられました。

ここまでパラグアイのスラムの状況をお話してきましたが、ここでパネリストの先生方、何か質問があればお願いいたします。

石川 私から女性の意識について質問があります。多分日本と比べて、すぐく貧富の差もあると思います。たとえば、ジェンダーの視点から見て、スラムに住んでいる女性と、アスンシオンというの首都の裕福な女性とい

うのは、ジェンダー的に意識を共有できているのか、できていないのか。ジェンダーの意識よりも、なにか別の意識が働くのか、その辺をお伺いできればと思います。

藤掛 植民地支配を受けた国に、もしかしたらある傾向かもしれないんですが、他国に支配されていた後に独立した国は、宗主国の人々の生活スタイルや文化を学ぶことで、貧困層の人たちよりも自分たちが優位に立つということを指摘する研究者がいます。経済的に安定してきた方たちは、自分達が安定している状況を確認する意味で、自分よりも劣位にある方たちを探し、差別化し、階層化が進んでいるという社会が、ラテンアメリカ諸国では多くあると思います。ですので、どちらかというと、スラムの方たちや農村の方たちを他者化してしまう、すなわち自分の問題ではない、自分と関わらない、というようなことで、そこには目に見えない分断があると考えています。もちろん、中にはこのような課題を解決しようと社会課題に取り組んでいこうという方もおられるとは思いますが、私自身も28年、29年パラグアイに関わり続けてきて、都市の人々と農村の人々の間にある壁は大きいなというふうに思います。

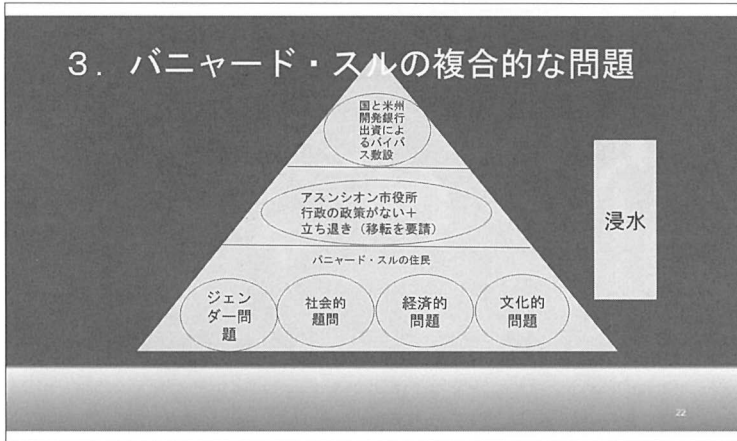
石川 そうですね、グローバルサウスという見方があるなかで、たとえば、グローバルサウスの中に、さらに、こう、格差があるということで、非常に難しい問題なのかという気がしております。では、藤掛先生、続きをお願いいたします。

藤掛 それでは、ここまでお話ししてきた社会課題に加えて、アスンシオン市役所の行政官がバニャード・スルの問題をどう捉えているのか、ご紹介いたします。大橋(2019)の研究によると、市役所体制の不足、土地の測量が進まない、洪水の被害が大きい、堤防の建設が進まないという語りが聞かれます。市役所、行政官の方も困っているわけですね。測量ができなかったり、人が何人住んでいるのかもわからなかったりということです。人口は5万から13万人と言われてはいますが、実際

にはもっとたくさん住んでいるかもしれません。また、前半少し触れましたけれども、パラグアイ政府公共事業通信局は、首都アスンシオン市の交通渋滞を解消するためにバイパスを敷設する計画をしています。交通渋滞を解消すること、そして、川沿いの住民の不便さを解決することが政府が掲げる目的です。事業内容は、約66ヘクタールの地域に2,500世帯の家を建設して、スラムの住民に移転していただく、そして、7.5キロメートルの大通り「Costanera Sur (コスタネラ・スール)」と言われる道をつくって、そこをバイパスにするということで、米州開発銀行の予算1億2,900万米ドルの調達が予定されています。

私が現地でヒアリングさせていただいている中では、この地域の住民は、ゴミ処理場から離れたところに自分の住居が変わってしまうことによって、生業としてのごみリサイクル業ができなくなることから移転したくないと考えていました。また、新しいコミュニティをつくるのが非常に難しいとも言っていました。すでに自分たちが持っている、いわゆるコミュニティの文脈知のようなものなののでしょうか、そういったものがなくなってしまうので、政府が提供する移転先には移りたくない、あるいは移ってもすぐに戻ってきてしまうという状況です。政府のバイパス敷設計画に対しては、多くのスラム住民が反対しているという状況です。

ここまで話してきたバニヤード・スルの問題は以下の通りです。バニヤード・スルのリスクは浸水などの災害に加えて、社会的・経済的・文化的な問題や、ラテンアメリカに特徴的なジェンダーの問題があること、行政は、～言葉を選ばなければいけないと思うんですけども～ガバナンス能力があまり高くはない可能性が十分にあるということ、そして、私の調査も含め、アスンシオン市役所ではバニヤードの現状を把握している行政官があまりいないといったことを指摘できます。その上に、国のバイパス敷設という開発計画が進められていており、バニヤード・スルの住民は、反対しているけれども、その意見は行政に十分に通っていないということで、図に示すように3つの階層間で意見交換や情報共有が十分に行われていないということがわかっています。



画像：発表スライド22

次に2011年からの調査結果の一部を紹介します。さきほどお話したように、3つの階層間では意見交換が十分に行われていないということをお伝えしましたが、さまざまなNGOが、このバニヤード地域で活躍しています。たとえば、カテウラ出身の人々がごみをリサイクルして楽器を作り、オーケストラをつくって世界中で公演をして回っています。横浜国立大学にも2回ほどお招きしたことがありまして、非常に多くの方々の感動を生みました。横浜国立大学の学長室の上で演奏して頂きました。そのような楽団の方の活動や、パラグアイ政府系NGOだったり、米国開発庁傘下のNGOだったり、日本のNGOも診療所を作ったりしています。

私は大学の教員をしておりますけれども国際協力NGOで実践もしております。スラム住民へのヒアリングを通して、住民女性たちがネイル細工という技術を覚えてごみ拾いから脱却したい、所得を創出したいという声も聞こえてきました。そこでネイル細工を教えるプロジェクトを行うとともに生活改善や、性教育、ドラッグ予防教育なども行なってきました。

4. アクション・リサーチの結果 日本のNPOが支援したネイル細工プロジェクト 2019年3月～2020年7月末（16ヶ月間）



プロジェクト成果：修了生 109名、218%
女性の修了者68名、達成率136%
収入向上の女性27名、達成率135%（受益女性の39% 約4割）

2022/2/19

福岡国立大学都市科学 ©藤原洋子

24

画像：発表スライド24（出典：特定非営利活動法人ミタイ・ミタクニヤ子ども基金）

こちらの写真は私が関わるNPOが支援したネイル細工プロジェクトになります。この話は春学期の授業で少し触れましたのでおさらいのみいたします。アクション・リサーチを行った結果、スラムのシングルマザーたちは、このプロジェクトの実施を希望し、実際に非常に積極的に取り組みました。そして、135%の達成率となりました。予定していた方よりも多くの方がこのプロジェクトに参加して、そして収入向上も達成することができました。スラムの住民の方たちは、自分たちのよりよい明日を求めてなんとか努力している、行政の力が届かないこともあるかもしれないけれども、国外のNPOや、現地のNPOがスラムの住民とともに活動しているという事例もあります。

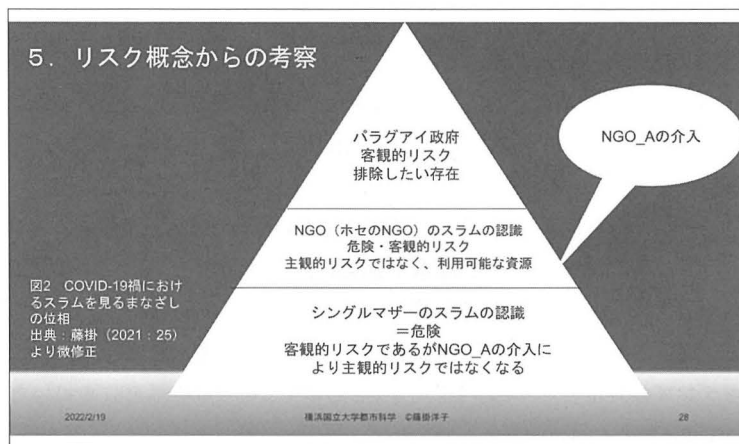
このようなアクション・リサーチを行う中で見えてきたバニヤード・スルで生きる住民たちの語りと実践をもう一度おさらいしていきます。バニヤード・スルは、パラグアイ川沿いから麻薬密売者が容易に入ってきて非常にリスクがある危険な地域であります。同時に、麻薬を売買するということは、スラムの住民にとってはお金を得る重要な手段でもあります。ネイル細工プロジェクトに参加した女性たちは、この地域で暮らすことを「怖い」と感じているんですけれども、「ここから出ていきたくない」とも

語るわけです。春学期の授業では、「どうしてなんでしょうか」と履修した学生たちが質問してくれました。その理由としては、「他の土地に行っても住むのにはお金がかかる、カテウラ出身者として差別をされるからこの地域に住み続けたい」という声があることを紹介しました。また、「カテウラはパラダイスだ。インフラやさまざまなものの整備は不十分であるが、近隣の人々と助け合える、こういったコミュニティの関係性があるから、ここから離れる気が全くない」。「地域でできる仕事をきちんと確立できれば、自分たちはこのパラダイスに住み続けたい」、こういう声が聞こえてくるわけです。

リスク概念を説明したときに、藤掛がまとめた図をもう一度掲載します。バニヤード・スルの人々は、浸水や強盗、社会的差別、ジェンダーによる差別など多くのリスクを抱えて暮らしています。しかし、このリスクに対して、捉え方が立場によって大きく異なることがわかってきました。最初に、ギデンズの外部リスクの話をしてきましたので、そちらの話を改めていたします。

バニヤード・スルは、ギデンズのいう外部リスクとして、洪水、パラグアイ社会特有のマチスモの表出によるジェンダー問題があります。そして、人工リスクと考えられる、政府による不十分な環境政策に加えてスラム住民に対する社会的差別があります。社会保障政策がない、あるいは不足していることは複合的リスクに分類できると考えます。そこに、COVID-19が起きた、これは外部リスクと考えます。COVID-19の拡大とそれに伴う形で増加した家庭内暴力は、女性に多く降りかかった複合的リスクだと考えます。カテウラの住民たちは男性と女性で異なる多様なリスクに直面し続けていました。しかしながら、このリスクを自分たちの戦略の中で読み替えている事例がありました。バニヤード・スル出身のホセさん(仮名)の事例を紹介します。この方は、現地で活動するNGOの代表をしているわけなんですけれども、彼は、スラムの住民の生活は逆説的であるものの、「一部改善していった」と語りました「COVID-19によりスラムの状況が世界に広く知れ渡るようになった結果、世界中から支援が届くようになった。COVID-19のお陰である」ということを言うわけ

です。ホセさんたちは、カテウラ地域にある外部リスクを戦略的に活用し、資源化していったと考えることができます。この点を主観的リスクと客観的リスクの観点からもう一度捉えなおしてみたいと思います。



画像：発表スライド28

ホセさんは中間組織の人、というふうに考えます。中間組織であるNGO～ホセのNGO～は、スラムには客観的リスクがあることを理解しています。しかし、主観的リスクではないわけです。国内外から複数の支援を受け、コミュニティの社会関係資本と接合し、地域の生活改善活動を継続・強化できているわけです。パラグアイのスラムには恒常的に客観的リスクがありますが、同時に、パラグアイ社会に残る母系主義的ではあるものの、コミュニティの強い紐帯があります。個人主義が強固ではない、すなわち「第一の近代」的な社会では、リスクが新たなコミュニティの発展につながる可能性があるということがこの事例より示されました。

また、これからの社会は、血縁のみではなく、地縁やコミュニティのネットワーク～これは非常に目に見えないものではありませんが～がとても大切だと考えます。この点は日本社会にも必要ですし学生の皆さまたちにも、学んでいただきたい点と考えます。血縁ではない、地縁、その中で

コミュニティの紐帯がある地域もある。それを私たちはきちんと見ていくことで、リスクの軽減を、地域の方たちと共になしえることができると考えます。

スラムのシングルマザーたちは、スラムでの危険やリスクを理解し、私に関わるNPOもそのリスクを回避するために、ネイル施術プロジェクトを実施しました。シングルマザーの方にとり、スラムの生活は、客観的リスクではありましたが、NPOの介入により、主観的リスクではなくなりました。すなわち、利用可能な資源に転換されたわけです。しかし、同時に、中間組織による橋渡しがなければ、COVID-19はシングルマザーにとり、客観的リスクで、主観的リスクでもあり続けたと考えます。これは、ジェンダーによる認識の差異であるとも言えるかもしれません。社会関係資本を分析したり、目に見えない紐帯を分析したり、コミュニティのネットワークや地縁を分析したり、地域の文脈知を見ていくときには、ジェンダーの視点を分析軸に入れると見えないものが見えるようになります。学生の皆さまにはそういった力、すなわち複眼的思考を獲得して頂きたいと思います。

たくさん話しちゃいましたが、一回止めた方がいいですよ。石川先生、先生方、是非ともコメントをお願いいたします。

田中 湿地帯に住む人々のスラムの話をさっきしていただいたんですけども、それに関連して、東京も、もともとは広大な湿地帯であったと言われていています。関東平野というのは利根川がつくった平野だということとはみなさんご存知だと思いますけれども、もともと、利根川は東京湾に流れ込んでいたわけですね。それこそ毎年のように水浸しになるようなところだったんですけども、江戸時代に、利根川東遷といって、太平洋の方に、銚子の方にですね、直接流すような大工事をした。だから、関東平野は人が安心して住めるようになって、東京という世界最大の都市ができたという歴史があります。インフラの整備っていうのはそういう役割があるんだと思います。一方で、インフラ整備というのはできるだけ多くの人が恩恵を受けるように進められることが通常ですので、そういう

過程で、どうしても立場の弱い人、お話しくださったようなスラムに住んでいる方が立ち退きを迫られるような場合もある。政府が、そういう人たちのために移転場所を用意する場合がありますけれども、それだけでうまくいくわけではなくて、お話しくださったように、その過程でコミュニティが崩れてしまったり、そのつながりが壊れてしまったりといったことも起きてしまうということかと思います。日本でも、阪神大震災の後だと思えますけれども、復興住宅を用意したけども、そこに移るときに近所の人と離れ離れになってしまったという話もあったと思いますので、そういったところもあわせて、ケアをしていかなきゃいけないのかなということは、お話を聞いて改めて思いました。

藤掛 学生の皆様には是非とも、こういったことをよくして行ってほしいですね。

松本 田中先生のお話とも関連するんですけども、藤掛先生のお話を伺っていると、日本でも江戸時代の庶民の生活が近代にかけてどう変化していったのかということが、すぐリンクするな、つながりがあるなって感じたんですね。江戸時代というのは、例えば、火災が非常に多くて、どこかが焼け落ちてしまっただけでどこかに避難するとか、災害に見舞われて避難生活を送ることはかなり身近なこと、今現在の我々から見るとかなり身近な出来事という側面があるんですよ。その中で、コミュニティの力を借りて、お互いに助け合いながら逞しく生き抜いてきたわけです。それが近代に入ると、非常に無駄が多いので方向転換して、別の生き方を選択して、建物を強靱化したり、インフラを整えたりして、日常生活の中は災害に脅かされずにすむような仕組みをずっと整えてきたのが現在に至るまでの状況だと思うんです。その中で、普段から災害のことを意識しなくてもすむ生活、それが当たり前になってしまうと、万一を想定しながら生きていく、万一に備えながら逞しく生きていくことが非常に難しくなりました。今現在だとそうですね。だから、何かあったら周りで助け合って逞しく乗り越えていく、そういう昔の知恵を、むしろ今学

ばなきゃいけないんじゃないか、そういう段階にきているわけです。このパラグアイでのお話は、洪水が毎年毎年起こって、一年の中で必ず避難生活をしなければいけない時期があって、その中で飯を食っていくためにごみ拾いをして、そういった環境の中で稼いで生き抜いていく術というのを獲得してるわけですね。もちろん不利な状況もたくさんあるんですけれども、我々が学ぶべきものをたくさん持ってるんじゃないかなという気がします。

石川 洪水の話題ですけれども、アスンシオンは河川地形を見ると、河川が昔から何年も蛇行や氾濫を繰り返している、そういう場所にあります。スペインが南米を侵略していくときのルートが川沿いだったので、河川に隣接する場所に都市が形成されているんですね。もともと蛇行や氾濫を繰り返す場所ということに加えてですね、国のスケールで見ると、北西部で森林を伐採して、要は農地に変えるという土地利用の改変がすごい速度で起こっているんですね、パラグアイっていうのは。そういうことが起こると、天候がもし通常通りでも、雨が降っても、要は水の流れ方が変わってしまうので、たとえば、排水速度が速くなって河川にたくさんの水が、普段よりも多く流れやすくなってしまうということが懸念されます。こういう影響が、まあ人的影響ではありますし、かつ、気候変動、今後どうなるかわかりませんが、気候変動の影響でそれがさらに強化されてしまうと、今まで、なんとか耐えて、生活していた彼らがですね、スラムの彼らが本当耐えうるのかなっていうのが心配です。人新世と言われていますが、本当に温暖化が急激に進むと、最も影響を受ける人々と地域はスラムの人々やバニャード・スルです。私としては非常に気になる点です。

藤掛 そうなんですよね。開発のあり方はやはり方向転換をしていく必要があると考えます。これからの開発は、自然と調和した形で行われていく必要があります。私は2022年4月よりパラグアイでアグリツーリズムを展開していきます。どんどん開発をするのではなく、環境と調和した形で人々がより良い生活をしていく、そういった思想と実践を推進していく

ことがこれからの私たちの義務であると考えます。子どもたちに残していく社会が、やはり今のような状況ではよくないということを考えると一度立ち止まって考える必要があるでしょう。ただそこには、いわゆる経済的な意味での先進国と、新興国・途上国の間での対話がうまくいかないといけないということもあるので、これからも都市科学部のメンバーと考え続けていきたいとても大きなテーマであると先生方のコメントを聞いて改めて思いました。

三浦 今、石川先生がおっしゃっていたように、どんどん世界が温暖化していくかもしれない。こうした状況に対して技術知みたいなので、防災対策をしていくという方向性が一つあり得るだろうとも思うのですが、先ほど松本先生がおっしゃられたように、コミュニティがこれまで培ってきた知識や知恵みたいなものもやはり必要になってくるのかなというふうには思っています。技術知に基づくシステムが想定していなかった事態、例えばシステムからこぼれ落ちる人であったりとか、そのシステムを使いこなせないような人みたいなケースが出てくると思うので、そういう事態に対処するようなコミュニティの知恵、例えば、パラグアイのスラムで活用されてきたコミュニティの知恵みたいなものを維持させていくこと、またシステムと共存させていくことが大事になってくるかなと思います。

松本 さきほどコミュニティの知恵って非常に遅い、すごいなっていう捉え方を申し上げたんですけども、コミュニティの中で、経験をしながら育っていく知恵ってそんなにすごいスピードで蓄積されて変わっていくものではないので、適応できる範囲、範囲というか程度に限界があると思うんです。それなのに、自然災害とか、外的な要因の方がすごい勢いでどんどん変わってしまうと、コミュニティの力で遅く対応しようとしても、やっぱり限界があると思うんですよね。なので、自然環境が変わっていくスピードと、人間が適応できるスピードに大きなギャップがあって、それをどう埋めていくかっていう視点は非常に大事になるんじゃないかなと思っています。

梅原 まずみなさんの専門性に立ったコメントっておもしろいなと思いますね。見方が全然違うよねって思いました。一方で、みなさんに見えるゴールは実は同じような気もするんですね。アプローチは違うんだけど、横浜国大っていいなみたいな感じがしました。文理融合の知が統合されてゴールが見えてくる。そういう素敵な感じがありました。

藤掛先生のとこのパラグアイのお話なんですけども、日本も、全然違う形かもしれないけれども、今や格差って多いじゃないですかね。パラグアイのことは、なんか自分の鏡を映しているような、もちろん歴史的背景は全く違うんだけど、この格差社会って私の中でも問題意識があるんですね。大学もすごい格差が出てきちゃっているんで、この格差社会っていうのどうしたらいいのかっていうのはパラグアイだけではなくて、この国の大きな課題でもあるので、身につまされて聞いていました。特に学長というのは経営者で、大学間の格差も人間のそういう格差も同じじゃないかなって私の中にあるんです。社会のありようとしてね。そういうことを思いつつ、聞いていました。いずれにしても先生方の、専門性の全然違ったプロたちなんだけど、いいゴールを見えているというか、そんな感じがとても都市科学部らしいってというか、そんな印象を受けました。

5. まとめと都市科学部の今後の展望

- ・地域の文脈知、地域住民の実践知、暗黙知、技術知
- ・フレーミング
- ・ジェンダー視点
- ・色々なシステムから学ぶ
- ・ネガティブからポジティブへの反転の思考
- ・文理融合の大切さ
- ・複眼的思考を獲得し、都市の未来を創造する！

2022/2/19

横浜国立大学都市科学 ©藤掛洋子

29

画像：発表スライド29

藤掛 先生方のコメントありがとうございました。学長もありがとうございました。もちろん、国は違えど、地域は違えど、構造って同じ、あるいはすごく似ていると思うんです。学生の皆さま方も、構造を見ていく力というものをつけて頂きたいです。それから、フレーミングということを授業でもお話しましたが、立つポジションによって同じものを見ている見え方が違う、見え方が違うけれどもその相手が見ているものに想いを馳せて、相手に寄り添って、相手の懐に入って、対話をしようと努力する、その複眼的思考を、都市科学部生は備えることができますと思います。学長が、目指しているところは一緒だけどアプローチが違っていると仰られました。富士山にみんな登ってるんだけど、登っているのが静岡県側からなのか山梨県側からなのかっていう、そういうことだと思います。私たちが都市の未来を描いているときには、この複数の道、その複数の道のどれもが大切で、そのどれを選んでも都市の未来を描くことができるような、そんな都市科学部を目指したいと思いました。そして、やはり重要なのは、地域の文脈知、それから地域住民の実践知、暗黙知、技術知といったことも理解する力です。多様なシステムから学んでいくということも必要です。

このシンポジウムを開催するきっかけになったのが、石川先生との会話でした。リスクを考えると、自分たち(石川先生)はどうしてもネガティブに考えちゃうけど、藤掛先生はポジティブに考えるんですねっていう会話がこのシンポジウムのきっかけだったんですね。なので、ネガティブなものをポジティブに転換する、反転の思考っていうものもすごく大事な気がいたします。

やっぱり文理融合は優位性があると確信しています。皆様都市科学部に入ってくれて、本当にありがとうございます。都市科学部生には本当に素晴らしい未来が待ってますので、文理融合の力を獲得して、社会の中で大いに活躍していただきたいと思っています。都市科学、そして都市の未来をですね、想像して行ってほしいなっていうふうに思います。

どうもありがとうございました。

2.4 「第1部：参加者からの質問・回答」

石川 続きまして、このままSlidoを使った質問を紹介していただきまして、先生方からコメントいただきたいと思います。それでは、都市科学部2年生の入江遥斗さん、お越してください。ここからは入江さんに協力いただきまして、スライドでいただいたコメント、質問を紹介していただきます。入江さん、簡単に自己紹介からお願いいたします。

入江 ありがとうございます。みなさんこんにちは、学生メンバーの方を務めております入江と申します。今回のシンポジウムでは学生メンバー3人おまして、環境リスク共生学科3年の猪俣悠介さん、そして、都市社会共生学科3年の田名麻衣子さんがご協力をいただきました。

今回自分は「都市を複眼的に思考する」というテーマ設定や第二部「都市科学／都市科学部をビジュアル化する」のコンセプトメイキングを、先生と一緒に決めさせていただきました。皆様からもSlidoを募集させていただきました。途中で音声トラブルなどもありましたが、無事、皆

様の質問をお受けすることができてよかったなと考えております。

ここからは学生の皆様からいただきました声を、この場に僕がスピーカーとなって共有できたらと思っております。皆様から大変多くのコメントをいただきました。特に多いと感じたのが、誰かにとっての客観的リスクというのは誰かにとってのまた新しい主観的リスクの出現になる。例えば、公共的な介入があったとしたら、ホームレスの人を排斥しようみたいな動きになったら、街のアイデンティティとしては、リスクを乗り越えたというか、リスクを軽減したんだけど、ホームレスの人にとっては、それは主観的に見るとまた新しいリスクが出現した、というような、そのようなですね、コメントが、語り口は違っても、多く見られました。

また、コロナ禍によって、この格差が顕在化したとか、格差がアイデンティティを生むとか、そういった格差が新しいアイデンティティとオリジナリティを生むっていう、その格差をなくすことによって、もしかしたら、都市であったりとか、コミュニティは均質化しちゃうんじゃないみたいな声も上げられました。また、同時並行して、「皆さんにとってのリスクとは何ですか」ということを投票機能を使って質問させていただきました。現時点で15件の回答をいただいております。

ここでは、やっぱり、人間の構造によって起こる不確かさの揺れ幅だったりだとか、その進化とか革新とか発展みたいな前に、何か物事が進むときに必然的に生じてしまうもの、などというかですね、コメントがあげられました。やはり、このコロナ禍を通じて、私たち学生も、都市というものが、家にとどまっていて見づらくなっている。実際のフィールドワークなどがなかなか行えていない現状においても、この都市科学A・B・Cの学びを通してですね、コミュニティは何かとか、これからの都市はどうなっていくのか、またリスク共生、個人個人ですね、立場に置き換えたリスク共生というのを伺いたいっていうのを感じます。

学生コメントの取りまとめは、以上となります。

石川 何か質問はありましたか。

入江 そうですね、質問として現在あげられていたのが、いくつかあります。その中でも、特に答えていただきたいなと考えたのが、子どもたちは生まれてからどのように地域のコミュニティに入っていくのか、日本のコミュニティの入り方、パラグアイとか南米のコミュニティの入り方と日本のコミュニティの入り方というのはまた違うのかっていう質問が寄せられていました。これについて、藤掛先生いかがでしょうか。

藤掛 素晴らしいコメント、学生の皆さま、参加者の皆さまありがとうございます。一生懸命聞いていただけたんだなと思い大変感動しております。

パラグアイの子どもとコミュニティの関係なんですけれども、どちらかと言うと、コミュニティで子どもを育てるっていう雰囲気なんですよ。『第二の近代』のように、家庭の中で、子どもが母親のみに育てられる、育てていくっていう、核家族のようなものではなくて、なんていうのかな、大家族制みたいな。本当に、コミュニティで生まれ、コミュニティみんなの子ども、社会が子どもを育てるという感じです。実際、私も経験してるんですけど、フィールドワークしているときに、赤ちゃんが泣いてたんですね、草むらで。捨てられていたんだと思うんですね。私の、もう28年来の友人が、「私自分の子どもにする」って、それで、本当に里親っていうか、実子にして育てています。子どもは社会が育てるもの、子どもは地域で見っていくもの、ってそういうふうな入り方であるので、それは私たち日本人が見習うべきところがたくさんあるなって思います。

日本はこれからは外国の方をどんどん受け入れて～すでに多くの外国につながる方がおられるわけですから～、共生していかなければいけない中で、肌の色が違うとか、言葉のイントネーションがちょっと違うとか、海外にずっと住んでたからゲームの会話に入っていけないので排除するとか、実際にあるわけです。同一性を強く求める社会の中で、やっぱり多様であっていい、ダイバーシティですよ、多様な人がいて、それが社会を活性化するし、よりよい発見がある、イノベーションを生む、そういうふうな社会になっていく必要があると思うので、パラグアイの子どもとコミュ

ニティの関係性から私たちが学ぶべきものがあると思います。

入江 なるほど、ありがとうございます。家族っていうものの認識というか、家族として捉えている以後の人々の形態、その広さというのはまた違うのかもしれないです。

藤掛 そうですね。私はパラグアイに家族が3家族いるんです。血はつながってないんですけど、心の家族です。村に家族がいて、町に家族がいて、首都に家族がいて。パラグアイの家族も私のことを家族とってくれています。なので、家族の捉え方が違うんだと思います。

入江 ありがとうございます。それではつづいての質問の方に参りたいと思います。

こちら匿名の質問ではあるのですが、「民主化はどのような歴史的背景から行われたのか。また、そうしたコミュニティとかこのマイノリティ、コミュニティ内におけるマイノリティの人々の声っていうのは、あまりその中央に反映されにくいシステムなのではないか」ということをコメントをいただきました。コミュニティや、都市におけるコミュニティを専門となさっている三浦先生とか、こちら辺については、どのように考えていけば良いのかということをお教えいただけると幸いです。

三浦 これは難しい質問ですね。この質問はパラグアイに関することではなくてですか。

入江 パラグアイもそうですし世界全体、あるいは日本国内においても、何か特殊な事例や共通性みたいなものがあれば。

三浦 そうですね。いや、非常に難しい。なかなかマイノリティの声が届かないという現状は、日本だけでなく世界中共通していることなんだろうと思います。それこそ、今、都市研究だと、「都市への権利」という

議論が流行っています。今どんどん新自由主義化が進む中で、マイノリティの人たちの生活状況が非常に苦しい状況にある中で、都市で生きる権利をいかに要求していくことができるが、世界中で議論されているところです。では、どうすればいいのかというなかなか難しいところではあるのですが、さきほどの藤掛先生の話と繋げるならば、それぞれのフレーミングというものがあるわけですね。政府がリスクとして捉えるフレーミングがあって、またその一方で、マイノリティの人たちが捉えるフレーミングもちろんある。おそらく、どのフレームが唯一絶対の正しいフレーミングだとは言えないんだろうと思います。ただ、現状としてはやはり権力差というものがあるって、政府のフレーミングが強い状況があり人々の生活を大きく規定していると思うので、それをこう、うまくいかに共存させていくことができるのか、ということがすごく重要になってくるのかなって思いました。

入江 ありがとうございます。多分、いろいろなところ、いろいろなコミュニティであったりだとか、これからの学生の皆が取り組んでいく分野の研究に、活かしていくのかなというふうに思いました。ありがとうございます。

続いては、少し都市構造的な質問をさせていただきたいんですが、松本先生でも田中先生でも、どちらでも多分ご回答いただけるのかなと思います。二つ質問がございまして、一つめは、インフラ整備がリスク軽減につながるというふうに思っていたが、実際は、立ち退きとかで、そうじゃないかもって意見が出ております。学生からあげられていた具体例は、アンチホームレスオブジェみたいな、ホームレスの方が公園の中で、今まではテントとか張ってたのに、それが出来なくなるようなとげとげした建築物とか、あとは、ゲーテッドコミュニティ、柵で囲んだりだとか、物理的に囲んだり、あとは、地域として何か囲い込みを行って、周域との経済的、あと、文化的な格差を生んでしまうような、そういうまちづくりは、周域との経済的、文化的な格差を生んでしまう可能性はあるのでしょうか、というような質問が出ております。何か、もしここで、具体的な事例

であったりだとか、こういったインフラ整備における、いろいろな方がリスクを軽減していくっていう、その部分で、リスクになってしまうような、新しい問題点など、知見がありましたら教えていただけると幸いです。

松本 そうですね、これも非常に難しい問題なんですけど。何か対策をとっていくうえで、世の中の多数派を相手にして、ある程度大きな規模で展開していくような、そういうものは、政府などが政策としてうっていくのが得意なんですけれども。ただ、その場合って、世の中にはこれぐらいの生活をしている人が多いですよって、ある範囲を想定して、その人たちにメリットが出るように、効率よくお金や資源を分配していく、政府はそういうミッションを持っていると思うんですよ。

だから、政策って必ず想定範囲があって、世の中にはその想定範囲外で生活している人が必ず出てくるんですよ。だから、その政策の中で取りこぼされた人たちを、どうフォローしていくのか。そこで、一般の人たちの、感性というのかな、都市に対する感性が問われるところだと思うんですよ。

例えば、いろんなNPOだとか、そういった人たちが、フォローのために頑張って仕事してくれているわけですけども、NPOの人たちだからそうしてるんでしょう、ではなくて、一人一人の人間が想像力を持つことというのかな、それが非常に重要なんじゃないかなと思っています。そういった問題を解決するには、根本的には、一人一人の人間が、自分とは違う生き方をしている人が世の中にはいるんだぞと、その想像力を持つことが必要んじゃないかなと思いますね。その中で、NPOとかじゃなくてもやれることがいっぱいあるわけですよ。ホームレスの人たちが住みにくくならないように、日常のゴミ出しの段階から気をつけるとか、やれることって実際にはいっぱいあると思います。

入江 なるほど、どうもありがとうございます。多分、ホームレスの方であったり、その、取りこぼされてしまう方というのがどうしてもいるっていうのは、やはり、そこはうまく折り合いを付けていかなければいけないな

と個人的にも考えてはいるんですが、私たち個人個人、一人ひとりが取りこぼされて、現状の社会制度においてとりこぼされてしまう人たちの存在を日々認識し続ける、思い続けることみたいなことが、大切なのかなというふうに思いました。ありがとうございます。もし、田中先生、何かコメントなどございましたらお願いします。

田中 今、松本先生の言われたことと全く同感なんですけれども、やはりインフラ整備ってそういう側面があってですね、全体の最適と言いますか、できるだけ多くの人の方の生活水準をあげるとか、そういうところを目標にしていることが多いので、どうしてもそういう一部の方にしわ寄せがいくってしまう面ってというのはあるのかなと思いますので、今おっしゃっていただいたような、別の形でのサポートといいますか、ケアというのが、そういうのが必要でしょうというのは全く同感です。

また、ちょっと違う話になるのかもしれませんが、個人個人についても、リスクを軽減すると別のリスクが生まれるというのがやっぱりありまして、インフラを整備して安全になった、快適になったとしますと、それで今度は人間の方が行動を変えてしまうという場合もあります。例えばですね、曲がりくねった山道を広いまっすぐな道路にするとします。そうすると、みんな安全になったと思ってスピード上げるんですね。こういうふうに人間が行動を変えた結果、結局事故の数はそんなに変わらないといったことが起こります。そういうのを交通安全の分野で、リスク・ホメオスタシス理論っていうんですけども、人間が認識するリスク、これは主観的リスクですが、これは客観的なリスクと必ずしも一致しない方が多くって、そういう主観的なリスクが、人々の行動を決めているところをやっぱり理解してないといけないと思います。そういう意味でですね、人がどういふような認識をして、判断をして行動するか、その結果が都市の活動としてあらわれてきますので、そこの部分を都市科学部の我々でも課題としてきちんと認識して、それを改善していくということが必要なのかなというふうに思っています。

入江 なるほど、ありがとうございます。私たちが、見えているものだけがリスクではないと。見えていないものも、もちろんリスクとしてあって、その部分をいかに追っていくか、いかに、その見えていないリスクに対する配慮ができるかというのは、多分これからの私たち求められているのではないかなというふうに思いました。

石川 それでは、時間がまいりましたので、質問のコーナーはこれで終了したいと思います。沢山の質問、コメントありがとうございました。そして入江さん、どうもありがとうございました。

入江 ありがとうございます。

2.5 第1部：閉会の挨拶

石川 それでは、藤掛先生から第一部閉会のお言葉をいただきたいと思えます。

藤掛 改めまして、学長、パネリストの田中先生、松本先生、三浦先生、司会の石川先生、入江さん、そして、機械の操作を担って下さっている下出先生、都市科学3年生の猪俣さん、本当にありがとうございました。あと、都市科学部3年生の田名さんがオンライン上でいらっしゃると思います。多くの方々に本シンポジウムのご準備と運営にご協力いただきました。私のパラグアイの事例が、新しい都市科学のあり方を考える一つの参考になればとても嬉しく思います。今日はほんとうにありがとうございました。